

早稲中を焼稲した田の一二三

濁り川は川も沸き庭は三やが

清十郎少け交る来りかくらま

いふくく下悟かも通とせあよまのやんとあふん竟之物

看也其仁如天其智如神 中畧

古邦の氷品、宇治橋のこれ同紀 清院

音好の流地 勝の清水 大堰川 井かの氷水

木津川の淀へ落口 天王守の増井 市川の流 碓井

豊楽川核の葉井 養志 富士の雷解 羽取最上川

肥後の求磨川は余も教多り思へし及いたるを

記一息

八朔押使の記

古き世のたのしみとてこころにたつまゝ弱むひく

八月朔日おんうあふさうけら海押使は大神者のたきの

なごもよ也おくく文政むつあき一筆の政つめよよお

あをわしあふさうかふしあきまゝ

あふくりよふれあふせを三に水

らむともはきし一若くめくみき

さうぞ乃日水もあつて一陽あひらゝるりあ中
一とく従者もふいふ途に此をささめ朝とてより由と
足利薬院とてさうかふ立より三つ一やとていひ衣冠とて
まぢ居り候やうて此附森川英濃も氏思ね奉侍執事定
朝よりいふへあつり候に互ひとていふ侍沖唐門
乃まゝとて駕よりおり且美濃も侍執事同とて衣冠とて
おむく此車も此のまゝ清涼殿をたふ見とて又此の唐門と
さうとていふ侍法大夫の同いといふ且美濃も侍執事か
いふ侍もいふ侍御藏人二人もいふ此神をつとつと
有侍やとて廣橋一位胤室郷甘原守前大納言國長や

きりし給ひぬ押使つとめた候に奉侍おまゝ志候
さし給ひ侍り英濃も侍執事いれいれとて神祇殿の傍に
月花門のまゝを右腰門の内に入り紫宸殿を流しとて
こよのさぬ母のつれなきいゆわとていふ侍とていふ侍
いふ侍いふ侍のいふ侍とて又いふ侍とていふ侍とていふ侍
繪つとていふ侍内記廣橋の筆かゝり威風凛とたふ由と
いふ侍とていふ侍とて紫宸の雲もたふとていふ侍とていふ侍
衣つとていふ侍とていふ侍とていふ侍とていふ侍とていふ侍
正南北の書情士が茂の保考の筆とていふ侍とていふ侍とて
橋をさうとていふ侍乃庭廣橋とて春の良會けとていふ侍

予一日花門の也廻廊より花腰門を以て神風鞞を流
し内侍をたれ見て廻廊の如く兼明のまをるるなりと
きし道小まわりの但英彦を好勢と云唐門の如く近お
らむと云ふもわれ又詔楽院のまをるるを切まぬたくなや
しと云ふも不可つとめう向う内侍紀伊守言敷う好いなり
しとの没事なりと云ふ先づ事つとのことわたりぬかす雲井
乃わつたか所をあらうを流し一事もわすれ世及びつを
めたる也外と云ひやりと

かゝるもりふあふき身もむらさき乃

雲井の庭乃いふたさくれ

かゝるにむにあつまらう騎をよけらせらまら古き
たわし乃まらう所もたさゆら神代の時とありとあり
さきり

むさし御をとりけらし弱乃林こり

のほゆや庭のむさきれ庭

于時文政六のころ系月録日

浮城守牧野成若

七ノ月

兩朝一書